

第 14 回 JDA 九州ディベート大会決勝戦 天白氏の講評

ここにいる方に加え、ここにいらっしやらない方もご覧になっているという前提でお話をいたします。今回の試合は、議論の量も多く、非常にハイレベルでした。初心者の方にとってはボリュームのある議論量だったと思いますが、その量に比して、スピーチの内容は大変わかりやすいものであったと感じます。議論をわかりやすくする技術は、昔に比べると本当に向上していますが、この両チームは、自分たちの議論で何を立証したいのか、相手の議論と自分たちの議論でどこが違うのかを、わかりやすく無駄のない言葉で話すレベルの高いコミュニケーションがなされ、聞いていてとてもよくわかりました。議論の質と量の両方を満たした、掛け値なしに素晴らしい試合を見せていただき、心からありがたいと思っております。その上で、議論というものはアンリミテッドですが、もう少し、さらにもう一步議論できるんじゃないか、ここで勝負を分けたかなと思うところも含めて、少しお話をさせていただきます。

両チームとも準備が素晴らしく、外国の文献は原典を当たり、とにかくよく調べておられます。まず肯定側のケース、メリットの部分ですが、非常に緻密な論証をしていますが、少し物足りない部分もありました。それは、現状の分析と重要性のところですか。国民投票をするとこんないいことが起きますよ、きちんと投票できますよという話は充実していました。しかし、その前提となる、なぜ国民投票が必要なのか、あえて、国民に決めさせることがなぜ必要なのかというところは、もう少し深く掘り下げることができたのではないのでしょうか。これは、いろいろな次元の問題があると思います。法律というのは、国民自身が納得する形で決定したという前提がなければ、その正当性は裏付けられません。そうすると、民意に裏付けられていないものを、権利、義務として課してもよいのかという議論になります。権利や義務を課すというのは、国民にある種のリスクを負わせるということでもあります。安保法案を例にとると、集団的自衛権を行使したことによって、逆に日本にミサイルが飛んできて、国民が何かしらの害を被るという可能性があります。このようなリスクのある法律を、そのリスクを負うべき国民の関わりなくして決めてしまってもよいのか、という問題が提起されます。ですから、そもそも国民に権利や義務を課す法律を、政府が勝手に決定するということが自体がよくないのではないのかといった、大上段の議論がもっとあってもよかったのではないのでしょうか。

それから、中身の議論についてですが、肯定側の内容はどちらかといえば解決的で、うまく投票できるかという話に終始していたと思います。これを重要性の話に反映させるのであれば、一例として、国民が自分自身で決めた方が中身としてもよくなるという話もできると思います。これもいくつか考え方があって、一つは技術的な面で、強引に決めている議会よりは、国民の方が真面目に決定していくのではないのかということです。もう一つの方向性は、自分たちの価値観にフィットした政策の方が、国民自身にとってはよいのではないかと

ということです。これは、自分の価値に沿ってはきちんと議論できるというルピア氏の主張もありますし、自分の価値観に合わないことでも、自分が決めた、あるいは選んだという事実がある方が、決められたことに対しての満足度が高まるのではないかということです。いずれにしても、考え方も考える材料もいろいろありますので、どれかに絞って、あるいは複数でも、もう少し掘り下げて重要性を出すことができれば、よりよかったのではないかと思います。

次に否定側ですが、デメリットについて、マイノリティの権利侵害の話が出ていました。これも価値の問題です。マイノリティの権利は大事であるという命題を、両チームとも前提にしてしまっています。ディベートというのは価値を比べるものですが、肯定側にも強硬ではないにせよ、強引に決めるのはよくないという話は残っています。その辺りは第二反駁肯定側で非常に印象的にスピーチされていました。性格的にちょっと否定はしにくいけれども、実際にはごり押ししてしまっているから、結局は、まあそうでもないね、世論も変わったという話になっています。これは事実として反対を押し切っても、押し切ったことをいざれ忘れるということに通ってしまっている訳です。これは結構重いことですね。ですから、これに立ち向かうとすれば、デメリットが大きいということをおっしゃなければなりません。そして、それを言うためには、争われていない深刻性、つまりマイノリティの保護は国家の義務だという話が重要であるということ深く掘り下げて述べておかなければ、比べた時にやられてしまいます。少数者の権利というのは、侵害の文脈などいろいろとありますが、今回の肯定側のチャレンジは、実は、少数者の権利は、国民投票によって勝ち取ることができる側面があるという議論でした。確かにこれはあるかもしれません。もちろん、否定側も反論、再反論しています。少数者の権利が保護される、あるいは剥奪されるという二つのベクトルがあるとして、否定側は少数者の権利剥奪に着目している訳です。もちろん、獲得できる権利というのが重要で、そもそも基本的人権とも言えるそれがないことが問題で、肯定側が述べていることは重要かもしれません。否定側の意見は、むしろ、そこから更にマイナスになってしまう、今でもマイノリティというだけで十分な権利が得られていないのに、さらに奪われてしまう。そういうことを多分述べていたのだと思います。でも、そこから、それというのは実は新しく権利を得るということよりもひどいのではないか、という議論に発展させることもできたのではと思います。

もう一点は、マイノリティの権利は大事だと言っていますが、肯定側が述べるように、価値との関係で議論してみんなで決めましょうと決めて決めた場合、マイノリティというのはまさに国民投票を行った時の少数派になる人のことですね。そういう人たちが、多数決の結果による勝ち負けの、負け、ということであれば、多数と少数の戦いの結果、負けたということであって、これは民主主義のあり方としてはおかしいのではないだろうか、それは許されないのではないかということになってきます。そういう状況は絶対に防がなければならないし、だから今は、間接民主制になっているのだという大きな話ができると、また違っ

てきます。ハイナル氏が述べる、ラティーナは負け続けている、という話の中の議論のように、これだけは達成しなければいけない、これは絶対に防がなければならないという議論が、肯定側からも否定側からもできたはずです。そういう議論がもう少し出てきて、このたくさん議論の中でもこれが大事なのだと、この部分で相手を上回るといった議論、そこまでのもう一歩があればさらによかったと思いました。しかし、両チームとも非常に高いレベルでの議論のぶつかりでしたので、ジャッジは迷うところで、得票数が結構割れているかもしれませんし、割れ得る試合だったと思います。

議論内容の主だったところにもコメントを差し上げますと、まず肯定側の、現状、の部分ですね。政策単位で重要な争点が必要しも議論されていないということを書べられています。例えば安保法案というのは、国民の意思を無視して決められているというような話です。こうした話は公的な場できちんと議論することは大事です。国民投票として引きずり出されても、議会で発議されても議論することは十分にできます。徳島の可動堰のように国内にも例があるし、スイスに至っては、国民投票という制度が国民の成長に繋がっているという例もあります。最後に、そのような制度が置かれることによって、制度そのものが反対でひっくり返されないように、きちんと説明するようになりますよと主張があって、立論としては十分に説明され成立しています。これにはいろいろな反論がありました。現状について反論するところで、安保法案については、現実には必要だと思っているという話がありました。否定側はこの辺りをもう少し深められなかったのでしょうか。否定側のストーリーに乗せていくような現状の反論をするのであれば、国民がきちんと判断できていないからこんなふうになっているのではといったところにまで話を持っていかなければ、相手のストーリーを傷つける議論にはならないでしょう。ただ、これは時間を使う反論ですので、本当にすべきかという懸念はあります。両チームとも武器をたくさん持っていますし、時間も限られているので、カード 1 枚だけを読んで、どこまで意味があったかということさえ議論になるレベルの高い試合ですよ。

そして、解決性についてです。解決性については議論が満載でした。解決性の 2 点目、徳島の可動堰については、徳島県民は関心があったかもしれませんが、国というレベルでの関心はどうであったのかということに対して、肯定側からは、テーマに対して国レベルでの関心があればよいのではないかという話が出てきます。ただ肯定側は、安保法案の例でそう述べているので、その辺から話を説き起こすのでしょうか。ただ、100 万人という人数は、スイスと同じだという話がありましたが、ちょっとイメージがしにくい。徳島の可動堰問題がすごく気になるのかというところでもないという気がします。ですので、この辺りの議論は、判断がわかれるところだと思います。スイスがうまくいっているらしいという話は、質疑を入れながら聞き直したりして面白かったのですが、日本でどれだけそれを参照できるのかという部分については別の議論にもなります。ただ、自分で決めるということが大事であるという議論は、結構説得的ですが、重要性のところその種となるような議論がもっと

あれば、さらに説得的になったと思います。ここも判断がわかるでしょう。肯定側の立論の中で、ルピア氏の自分の価値観に合ったような投票をするという話に加えて、マイケル氏の研究で、どういう理屈かわかりませんが、逆の結果に投票したという摩訶不思議なエビデンスが出てきました。また、国民はそんなに能力がないという話もあり、しかし、能力がなくても、わかっていないなりに自分の意思に沿って投票できるということで、一応理性的に議論している雰囲気にはなっています。ですが、十分整理しきれていないし、そもそも整合的な説明ができないのかもしれませんが、大変難しいところですが、この辺りの説明がもっとあれば、違った議論になったかもしれません。

それから、もう一つ、肯定側からの、スイスがうまくいっているのは投票する回数が多いからということですが、否定側のロジックでちょっとおもしろかったのは、数が多いというのは、国民投票の数だけではなくて住民投票も多いからということなんですね。実は、住民投票の実施は日本では結構難しいんですね。日本も、スイスの1%の発議要件が一緒なので、同じように起こると肯定側は示しましたが、ここは否定側が1枚上手で、日本は住民投票の数が少ないから、スイスほど投票の機会もなく、教育の機会も少ない。さらにスイスでも、よくわからないけど投票するということが実際にあるという反論でした。わからないまま投票することがよいのか悪いのか、正直よくわからないところもあります。肯定側から、議員を選ぶ時でもよくわかっていないという話が出て、なかなか難しいところです。ただ、否定側の立場は、おそらく、重要性に対して反論したということだと思います。結果は大事であるし、短期的にはやっぱり、国民は間違えることがあるので、それなら距離を取った方がよいのではないかという考え方を示したと言えます。日本では、スイスのように教育ができないし、そのような人たちに投票をさせてもよいのかということへの個々の反論をどう評価するかについては、判定がわかれると思います。

否定側のデメリットで、マイノリティ、少数者が傷つくという話についてです。現状では、公的に討論して形を作らなければいけませんから、あからさまな差別立法は通りにくい状況にあります。しかし、実際に投票できるようになると、だれも責任を負わずに秘密裏に投票できるようになるので、まずい投票が増えるという指摘があり、実際にアメリカでは増えているということでした。これに対する肯定側のチャレンジは、例えば夫婦別姓問題など、政府は世論を無視して全くやる気はないし、麻生副総理兼財務大臣は、糖尿病患者は医療費がかかりすぎて公平でないと言われたという話があることを指摘しています。否定側は、人権規約などを用いていろいろ反論をされましたが、人権規約というのは達成状況が悪いようで、全体で見ると、私は、否定側の話よりも肯定側の話の方が上回っていると思います。ただ、肯定側の、これから差別が起こる、無責任な投票になるという話は、現時点で既にあるのでデメリットとして新しく増える話ではないという主張が、否定側のロジックを切っているかといえば、そうでもないかなという気がします。今の政府が、そんなに権利保護的なところでもないし、あからさまに変なことを言う人もいるという指摘はわかりますが、そ

れによって法律が全然権利保護されていないとか、発生過程の話などが関係なくなるのかといえば、そこまでの議論にはならない気がします。ここもジャッジの判断がわかれるところでしょう。この辺りは、否定側は局所的に負けていますが、自分たちのストーリーを完全に否定していないという主張をもっとすべきだったでしょうね。

それで、発生過程についても諸説が出ましたね。否定側は、ギャンブル氏の、マイノリティに不利な法律が通りやすくなるという説が第一立論でした。これに対して肯定側は、ギャンブル氏の研究はサンプルの取り方がおかしくて、この研究を検証したハイヤー氏によれば、マイノリティは負けていないし、むしろ結果がよくて、本人たちも了承しているので住民投票で大丈夫だと反論しています。この後、ダニエル氏や、ギャンブル氏の研究を再度検証したというハイヤー氏の論文などが出てきました。否定側は、ゲイは負けているし、全体的に見てもマイノリティは苦しい立場だということですが、肯定側も反論としては負けていません。ただ、ここで、フクイ氏が紹介している、最初は否定されたが議論が高まり合法化に至ったというイタリアの中絶問題で、マイノリティの権利は保護されるといった例などを、さらにもっと引っ張ってくるができること、非常に迷う訳です。否定側も、トータルで見るとやっぱり傷んでいるということや、2倍、あるいは5倍通りやすくなるとは言え、個々の数字を見たらやっぱりだめではないのかという話もできます。さらに、マイノリティが喜んでいるように見えるということも、否定側の議論で整合的に解釈できて、国民投票だけを見るとまともに見えても、議会では、その分敵対的になっているということにマイノリティが気づいていないから、全体を見た時にどうなのか、という議論に持ち込めるかもしれない。私が否定側なら、そういう説明ができたかなと思います。ですので、整合的に説明できるのだということ、否定側がもっと押し出していけば、ジャッジももっと振れてくると思います。肯定側もターンアラウンドを引っ張ってくるというのは一つの戦略になりますから、これに乗るジャッジもいるでしょうね。時間が限られていますので、全部を議論することはできませんが、非常にレベルの高い試合でしたし、いろんな議論が出て甲乙つけがたいところがあります。私自身、自分が選手でこれをやれと言われても、できるかどうかわかりません。

最後は、では日本はどうかという話です。否定側は、日本は異文化に慣れていないということもあるし、マスコミがイスラム国のことを騒いだこともあって、イスラムに対して差別的になっているところがあるということでした。加えて、海外でもキャンペーンが張られて、イスラムに対する差別があるし、うまくいっているとされているスイスでさえ、そうではないかという話がありました。これに対して肯定側は、スイスで差別があったといっても、全体で見たら10分の1ぐらいで、基本的にはポピュリズムみたいな考え方は排斥されて、きちんとやっているということでした。日本が、異文化には理解がないという話はわかりますので、国民投票で何か問題が起こるかもしれないというのはあるかもしれません。最後の方に、スイスでは、政治が宗教を利用したという話が出ましたが、日本でもそういうことが起こる可能性について、もう少し具体的に説明があってもよかったです。もち

ろん、議論の量があるのでそこまで出すのは大変ですが、一連の、日本でもってまずいんじゃないかという議論、欧米よりもまずいんじゃないという議論が、試合でどこまで影響するのか、他のジャッジの意見を聞いていないのでわかりませんが、決定的ではない気がしています。この辺りは、否定側の議論の仕方をもっと工夫されるとよかったと思います。

ざっと見たところで、皆さんの心にもいろいろ反論があると思いますが、本当に両チームとも死力を尽くした試合でしたので、どちらにも入れることができると思います。これだけ緻密な議論が出たにもかかわらず、最後の決め手を欠くというのは、レベルの高いディベーターでもやはり難しいということですね。とはいえ、この論題でのある種一つの到達点を示したと思います。両チームに改めて拍手をお願いします。